

## 基調講演 1 「知識を超えて愛するために」

高樹, のぶ子

芥川賞作家 | 九州大学アジア総合政策センター : 特任教授

<https://doi.org/10.15017/17924>

---

出版情報 : 九州大学アジア総合政策センター紀要. 5, pp.11-16, 2010-06-30. Kyushu University Asia Center

バージョン :

権利関係 :

## 基調講演 1

## 「知識を超えて愛するために」

高樹 のぶ子

(九州大学アジア総合政策センター特任教授・芥川賞作家)

皆さん、こんにちは。高樹のぶ子です。

先ほど、このシンポジウムのタイトルがあまりアトラクティブではないとおっしゃっていましたが、一応、私の基調講演のタイトルが、トゥー・マッチ・アトラクティブというが、ちょっとレトリック過ぎました。「知識を超えて愛するために」というタイトルでございます。

これは決して知識をないがしろにするわけではありませんで、知識で超えられない部分、あるいは、ともにやっていかななくてはならないという部分があるんだということを、小説家、フィクションを扱っている人間として、お話ししたいと思っております。

私がこの九州大学のアジア総合政策センターで、SIA (Soaked in Asia) というプロジェクトを始めたのは、もう4年近く前になりますけれども、既にアジアの8カ国に行っております。台湾も上海も、それから韓国にも出かけて、あと、大変なインドとインドネシアが残されておまして、今、カースト制度を勉強するのに大格闘をしております。

アジアと申しまして、今、この3国の連携が一番中心になるんでしょうけれども、それぞれの国が全部固有の問題とテーマを抱えておまして、私はその国の一人の作家として作品を日本に紹介すると同時に、文学作品が描かれるには土壌と歴史がありますから、それを知ること、また感じたものを日本で発信するという仕事をしております。

こういうプロジェクトを始めましたきっかけは、いろいろなことがあるんですけども、私にできる仕事は何かといいまして、まず、真っ白なフィルターでいろいろなものを感じて、それも個人の心の情報を文学を通して感じて、それを日本に発信するということです。

私の発信基地にはいろいろな種類があります。私自身が小説を書く、エッセーを書く、写真を



紹介する、そのような多岐にわたることをやっております。けれども、根本には、そこに一人の人間がいる、それも自分と全く同じ五感を備え、喜怒哀楽、苦しさ、楽しさ、恋愛を、すべて同じように感じている人間がいるということを知っていただくということをしています。いえ、知るのはないんですね。あえて申し上げれば、感じてもらうために最も適切なツール、心の情報を乗せる小船は文学であると信じてのプロジェクトです。

私はずっと小説の世界だけに生きてきました。小説というものがどういう特徴を持っているかということをも2点だけ挙げさせていただきます。

一つは、私たちは折れ線グラフのごとく単一の人生を歩いていまして、体験できること、経験できることは常に一つですけれども、それが積み重なって個人史になっていくわけです。けれども、小説を読むことで、ダブル、トリプルの人生を生きることが出来ます。このダブル、トリプルのもう一つの人生——アナザーライフというものについては同じ国の人間のほうが共感の土壌が大きいですが、国、あるいは民族、宗教、言語が異なる人間に触れ理解するという方法は文学のほかに映画ぐらいのものでしょうか。あるいは、サブカルチャーでいろいろ

るな情報が入ってきますが、データとして数値化されたものでは、なかなかそれは不可能なものです。つまり、根本的に私は、そういうたくさんの方の人生を生きたいという欲張りな人間がより増えていくということが大事なことだろうと思っています。

また、もう一つの機能は、そこに一人の人間がいる、それも、自分と同じ人間がいるということを実感する、感性で受けとめるというのは、先ほど申しましたように文学の力です。人の体温、吐く息、涙や感性、それから、愛情や憎しみがもたらす身体上の変化、苦痛や快樂、そういうものすべてが伝わってくる小説の力はすごいということです。

個人から個人へのアプローチというのは、人間を最も深い部分から動かしてくれます。この深い部分というところが何かといいますと、頭ではなく身体ということです。身体で感じたもののほうがより強い。これは私が女性であることと多少の関係があるかもしれませんが。男の人はどうしても論理から入って、その論理によって should、must の世界の行動規範に従い行動を起こしがちです。けれども私は女性ですから、もっと身体的な感情、肉体的感情ということを申しますけれども、そういうものから入ってきたもののほうが、最終的に強いという感じを持っております。

そういう身体的なものを動かすのは、さまざまなデータや数値ではなくて、やはり人間を実感するということです。そういうことが大学のプロジェクトとして成り立つのかということは大変なテーマで、もちろん今もさまざまな意見があると思いますが、九州大学にはそれを許容していただいて、このプロジェクトを10カ国で遂行させていただいています。

私自身が何をできるかといいますと、私自身がまず感じることで、つまり、頭ではなくて体で感じることを優先しております。その国に行って実感したもので、それが私を発信者にしてくれます。その発信されたものは、もしかしたらアカデミズムには合致しないかもしれない、その質のものではないかもしれないけれども、最終的には人を動かす情報になる、心の情報になるということを感じてやっております。

なぜフィクション、小説というものがそうい

う力を持っているかということに改めてまとめて考えてみました。私は今日、四つのことを挙げたいと思っております。

まず、小説に描かれているものは受け入れを迫りません。受け入れる人にイエスかノーかを迫らない、accept しろとは言わない、ただ、そこにあるということです。確かに、論理化された知識、データは必要ですが、これはそこでデータ化されたもの、知識として認められたもの、それは少なくとも確かなものだということを確認したものです。確かなものという確認を経たものは、後はそれを受け入れるか、拒否するか、二つしかありません。

具体的に二つの例を申し上げますと、現在、日本と中国の間で論戦になっていることの一つに南京虐殺の人数があります。これを科学的に、そんなことは可能ではないという日本の人たちがいます。いや、そうじゃない、確かにこれだけの人数が殺されたのだという中国の人たちが当然います。いつの間にか、そういうデータ、人数というものの正確さのほうに論点が移っていています。

これは、真理は何か、真実は何かということを追及することが、必ずしも物事の融和に向かわないんじゃないかということに私は小説を書きながらいつも感じます。南京虐殺においてもそこで行われたことのひどさ、非人間的な部分のほうに重要ではないでしょうか。そんなことをやった人間もまた中国人と同じ痛み、苦しさを抱えている人間だということの理解。もしかしたら、同じ場面が訪れたら、そういうことを起こすかもしれないのが人間だという理解。そういう一人の人間に対する理解というものを積み重ねるしか融和への道はないだろうと思えます。

何かあると、歴史的事実とかデータとか、真実は何かということにいかにも科学的に追及されますが、それが決していい形に向かわない。いい形というのは、人類の恒久的な平和です。その方向にいかないという事実がいろいろな部分であると思えます。

もちろん、これはうやむやにすればいいということではなくて、そういうものを追求する前に、そこに人間がいたんだ、人間の本質は何かということに、みんなに考え直していただく方

向に行かないものかと思います。

もう一つのたとえです。これはアジアとは直接関係ありませんけれども、私たちの頭の中では当然の真理としてありますダーウィンの進化論です。これは私たちにとって科学的な知識です。だれも異論は持ちようがないことでありますけれども、このダーウィンの進化論を全く信じていない人たちもいます。あらゆる生命は神がつくったのだということですね。これをこちら側にいる人間は、非科学的だと言います。でも、彼らにとっては、これは科学であり、知識なんです。科学であり、知識であるというものが、真正面からバッティングしている。こういう事態はおそらくイスラム圏とキリスト教の世界にもあって、これは宗教的なものですから科学とはいえないけれども、彼らには信すべき科学的な世界観があります。

こういう対立の中で、どういう融和が可能かというときに、私は文学の出番だと思えます。文学が人間を描き、別の世界、体制、社会、時間の中に生きていながら自分と同じ五感を備えている人間がいるという、その実感からしかほどけていかなないものがあるだろうと思っています。

科学は真理であり、真理のみが科学であるという考え方は必要なことでしょう。基本的なことは必要でしょう。いろいろなものがあるということ自体を知ることが大事なんですけども、そこにもう一つ別のものが付与されていかないと、どうにもならないという気がしています。

今、受け入れを迫らないのがフィクションだ、文学だということを言いました。二つ目、描かれるのは矛盾した人間です。優れた文学ほど矛盾した人間が登場します。決して一つの座標軸の上に乗っている人間ではありません。この矛盾した存在を提供するということは、結論を与えるのではなくて、自分なりの結論を探させる力があります。これは、一人一人に自分は何だろうということを考えるよすがになります。それが2番目。

3番目は、それとも関係がありますが、人間というもの、世界というものは矛盾しているということ。真理というのは、裏から表から見れば違ってくるということ。その矛盾した世界を文学を通して知るということは、同時に許容の

力を養う。自分が今の立場ではなくて、相手の立場になったときのことを想像する、それによって許容の力というのが生まれてくると思います。

そして、4番目は、真理や真実を求めることより、文学というのは何かの効果があるか、何が伝わったかということに重きが置かれています。真理と自分との対話を重要視するのではなくて、人間と人間の関係においてどんな効果があるかです。効果の質ではなくて、効果の量というものを目指して文学というのは存在しています。つまり、そんな男はけしからん、こんな人生はだめだと思人がいても、それも一つの効果です。それを正しい、すばらしいという人間だけではなくて、ネガティブな反応も反応であって、つまり、人と人がいかに大きなもので伝え合えるか、あらゆる種類の感情を含めて伝え合えるか、このことが大事なのだと思います。これは、アカデミズムでは目指さない質のもので、すなわち、私などは何をやってもしろいろなネガティブな反応が山ほどありますけれども、それも含めて、私は相対的なパワーだというふうに感じています。

こういうものを排除するのではなくて、もっと人間と人間の間でどんどん交流されていくことが、ネガティブなものも存在するというところを感じるチャンスになると思います。そういう意味でも、文学の力というのは単に芸術あるいはエンターテインメントではなくて、もう一つ大きい力を発揮していく、あるいは求められる時代が来るのではないかと感じています。

何か、総論的なことになってしまいましたが、せっかくでしたので、一つ二つ、私の8カ国訪問で気がついたエピソードを、今のテーマに関連してお話したいと思います。

写真1は1回目に訪問したフィリピンです。フィリピンの実情とか、あるいはいろいろな特質があります。犠牲者の血でもって革命が起きるという現実というものも、もちろんよく感じましたけれども、このブリアンテスさんという方は、ベニグノ・アキノさんというマルコスに暗殺された方の同級生で、ジャーナリスト出身で、ジャーナリスティックな目で文学を書いていらっしゃる方です。彼のことを今紹介するよりも、彼とのエピソードをお伝えしたいと思います。



彼の文学で今度紹介したのは、『アンドロメダ星座まで』（『新潮』2006年4月号掲載）という、遠いアンドロメダ星座の星に憧れ夢想する、少年時代の美しい作品でしたけれども、テレビもドキュメンタリーが来ておりましたので、望遠鏡を使って二人で星を見ようということになりまして、二人で星をのぞきました。でも、持っていった望遠鏡というのが、あまり倍率がよろしくなくて、ブルブルとしたゼリーのような白い塊がぼつと見えるだけでした。それも、ようやく雲の間に見つけたというような次第です。

私はこのときのエッセーでこういうことを書きました。その見つけた星というのが何星で、恒星なのか惑星なのか、あるいはどの距離にあるとか、もっともっと拡大された望遠鏡を使えば、もうちょっと科学としては確かだったかもしれないと思うけれども、これを科学するのはアカデミズムの仕事です。でも、私はこの星を見るためにブリアンテスさんと一緒に手をつないで、肩を組んで望遠鏡をのぞきました。そのときのブリアンテスさんの体のぬくもり、一緒にその星を見上げた、このことがSIAだと、Soaked in Asiaの目的だというふうにエッセーに書きました。

これは、真理を明らかにするという目的が望遠鏡で、そういうことが確認できるのかもしれませんが、何のために役に立つのかといえ、私はブリアンテスさんとの肌のぬくもりのほうが実際の役に立つというふうに感じています。その出来事は非常に象徴的で、出発の最初の国でしたから、私はそれでSIAの目的を自分の中で確立できたと思っております。

写真2は、ベトナムのメコンデルタで、お相

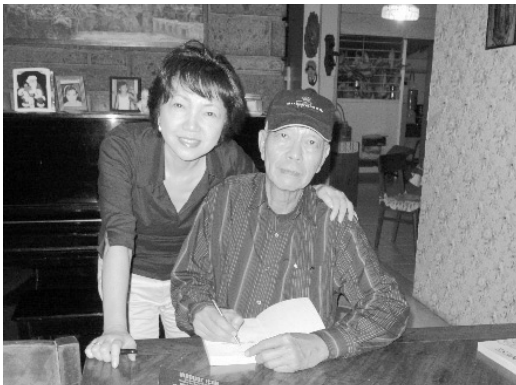


写真1

手のチャン・トゥイ・マイさんという女流作家は、私と同じような立ち位置の人です。恋愛小説を書いたりして、それがどんどん映画などにいろいろリメイクされています。ちょうどフエという真ん中あたりの町に住んでいらっしゃるんですけども、とてもチャーミングな人で、彼女とはなかなかいい時間が過ごせました。文学者というのはありがたいことに率直なんですよ。決してその場のことを考えて、あるいは全体の雰囲気から何かを発言するというのではなくて、個の意見、自分がこう感じたということ、を、真っすぐおっしゃいます。

彼女の『天国の風』（『新潮』2006年10月号掲載）という作品を紹介したんですけども、何で天国の風だと思ったら、ベトナムでは一陣の風がすべて天国から吹いてくるような気がします。彼女自身が『扇風機』というすばらしい短編も以前発表されているんです。これは、実際に現地に行ってみないと、何で風が天国なんだということがわからないんです。けれども、なるほど、これは天国だというふうに私は感じることができます。やはり、そこに入らなければ何にもわからないということです。

同時に、日本では今や扇風機よりも空調設備のほうが必要ですけども、彼女の『扇風機』という作品は、とても仲のよい恋人同士があまりに暑くて、うだってイライラしてけんかしてしまう。ここに1台の扇風機があったら、私たちは仲よくなれるだろうに、もっと楽しく過ごせるだろうにという作品です。こういう作品は日本では成立しません。それこそ、明治時代は、ここにふかし芋が1個あったら私たちは幸せだろうにというようなことはあったと思いますけ



写真2

れども、今、日本では扇風機1台がそんなに人間の関係を左右するというようなことはないです。けれども、ここに行ってみたら、それが実感できます。文学の力というか、発信能力というか、私はその作品を通して非常に多くのことを実感することができました。

また、彼女と一緒にではなかったんですが、カオダイ（高台）教という、南ベトナムの非常に怪しい宗教を訪ねました。祭られておりますのが、釈迦、孔子、老子、観音菩薩、ヴィクトル・ユーゴー、関羽とか、日本人は入っていたかな、ちょっと思い出せませんでしたけれども、とにかく、世界中のあらゆる偉人たちがここに祭られておりまして、このいいかげんさ。いいかげんだけれども、ちょうどそのとき世界は一神教同士の厳しい対立に入っておりますから、東洋的なあいまいさ、怪しさの中に平和があるんじゃないかというふうに思って、こういうものもあるんですよということを持ち帰りました。

一神教の厳しさというのは、自分の神を信じない人間は人間以下ですから、非常に厳しいです。けれども、これだけあいまいに、いいかげんにみんなが手を合わす。しかし、正面に人の目がぎょろっと置かれていまして、この目ににらまれて、人間はやはり自分の心に素直にならなければならないということはあるんです。私はこの宗教を別に信じるわけでも何でもありませんけれども、あるヒントを受けて帰ってきたということです。

写真3は、台湾のシャマン・ラボガンさんという作家に会いに台湾のランユイ島という小さな島を訪ねたときのものです。彼はここで文学活動を続けておられる作家です。ヨーロッパで



写真3

もそうなんですけれども、今度のノーベル賞はデンマークでしたっけ、とにかくヨーロッパの中でも、北欧や東欧、アイルランドという辺境の地で非常にいい作品が生まれていますが、これも中国でいえば、大陸があって台湾があって、さらに台北から飛行機で20分も行ったような町です。

ここで、私が胸を突かれたのは、台湾中の原子力発電所の核廃棄物がこの小さな島に貯蔵されております。それも海風にさらされて劣化しているから、いつどういうふうになるかわからない。今、徐々にその場所を移動しているようですけれども。

ここに日本の六ヶ所村の村長さんが責任者が来て、ここは大丈夫、安全ですということを講演でしゃべったらしいんです。そのしゃべった講演録というものがCDに焼きつけられて、お土産として配られています。つまり、この原子力発電所には日本が建てたものもあるんです。日本がそれだけの影響を与えて、しかも安全だというふうに保証している。この事実に対して日本はどの程度の責任を持てるんだろうということを、まず考えてしまいました。そのおかげで、政府のほうからたくさんの援助をもらって、逆にそのタオ族という少数民族はスポイルされているなというふうに私は感じましたけれども、こういうものを全部含めて、日本は非常に影響を持っています。影響と同時に責任があるというふうに感じました。

写真4はマレーシアです。多民族の共生ということについて考えさせられましたけれども、モザイクのようだというふうに感じました。マレー人、インド人、中国人が混在していて、宗



写真4

教も言語も全部違うところで、けれど、上手にというか、いろいろな問題を持ってありますけれども、けんかしていいことはないということで、すみ分けが行われています。

写真5は上海のパン・シャンリーさんという素晴らしい作家で、食というものがどういう意味を持っているのか、食べるということは何だろうということを追求しています。今、私は日経新聞にひんしゅくを買いながら恋愛小説を書いておりますが、このご縁で上海にも興味を持つようになりました。彼女もすてきな女性で、恋愛も人間関係も豊かな方でした。

この国のことを最後にしたいと思います。写真6は、モンゴルのダシドンドクさんという作家です。モンゴルは児童文学が大変盛んです。彼はモンゴル中を自分の言葉で、口承文芸でおしゃべりしながら子供たちに夢を与えているんですが、今のモンゴルの子供たちは、ある意味では自由経済社会の中で一番の弱者になりつつあります。それまでは社会主義体制で、そこがきちんとホールドされていたんですけども、自由な競争になってくると、教育の面でも何でも一番弱い子供たちが被害者になっています。それを救済するために、このダシドンドクさんは自分のできる文学でもって、いろいろな夢を与えていらっしゃいます。

彼の書いた文学の中で『ゲルの思想』というものがあります。ゲルというのはパオとも呼ばれており、昔からそうなんですけれども、自然を模したものです。暖炉が真ん中にあると、そこで煮炊きをするんですけども、煙突が空に向かって出ているんです。この丸い穴は太陽で

あり、ちょっと正確に覚えていませんが、周りを囲っているのは自然の森でありというふうに、ゲルというのは自然全体が人間を守っている姿で、それがゲルの思想です。

そうやって自然をありがたがって共生してきたモンゴルで、今、最も直接的に地球温暖化の被害を受けているのもまたモンゴルです。私はじっと見ていて、草本位制だなと思ったんですが、草の茂る分だけしか家畜が育たない、その家畜の数しか人間も生きていけない、それが草原の現実です。その草が、ちょっと前までは腰丈まで育っていたのが、今はくるぶしまでちょろちょろとしか生えてこないという現実がある。そういう草原で暮らせなくなった人たちがどんどん都会に入り込んでいって、都会の治安がよくないという状況も生まれています。また、竜巻のようなものも起きるし、ほんとうに自然と共生しようと思って、そういう思想を貫いてきた国の人たちが、自分たちの国のせいではなくて、今、直接的にひどい被害者になっているということを実感して帰りました。

ほかの国々にもそれぞれの思いがありますし、ご報告したいこともありますけれども、時間が来ましたので今日はこれで終えさせていただきます。どうぞ最後まであと2カ国、今、インド編でカーストと大格闘しています。大阪大学の先生のご協力をいただいて、今、理解しようと思ってやっているところです。インドとインドネシア編で10カ国になります。どうぞこのプロジェクトを最後まで応援していただきたいと思っています。

ありがとうございました。



写真5



写真6